

中長期目標 (学校ビジョン)		今年度の 重点目標		1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(卒業後を見据えた生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成) 4 幼児児童生徒に対する指導の充実を図るための更なる学校業務改善の推進			
年度当初				評価結果(10月)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(幼) (1)体験的な活動を通して様々な事象に興味や関心が持てるような環境や機会を設定する。	(1)きこえにくさにより、情報量が少なかったり興味や関心が広がりにくかったりする傾向にある。	(1)身近な事象に積極的にかかわり、気づいたり、考えたりする。	(1)個々の幼児の実態を把握し興味や関心が持てるような活動を設定する。 (1)具体物や絵、写真などを補助的に使い、内容の理解を促す。	(1)身近な自然や日々の生活の中から幼児に興味を示した事柄を活動に取り入れるようにした。 (1)視覚支援により内容の把握が容易になり、幼児が安心して活動に取り組むことができています。	C	(1)できる範囲で体験的な活動や行事ができるよう実施方法を工夫する。
	(小) (1)基礎学力が向上するよう、語彙を拡げ正しく使うための支援の工夫に努める。	(1)学びを深める発問の工夫により、自分の考えを答えられることが増えた。しかし、語彙数の獲得が不十分であり言語概念の形成等に課題がある。	(1)生活ことばから学習ことばを正しく身につけ、それを用いながら主体的に学習に取り組む。	(1)実態に合った検査を実施したり、学習記録を見直したりして的確な実態把握を行い、学部で共有する。語彙数の拡大や言語概念について、学部研究を通し学習内容や支援方法の検討や実践を行う。	(1)校内で行う検査については、2学期に実施の予定だが、外部の関係諸機関が実施した検査については支援会議等で説明を受け、指導にいかしている。語彙や言語概念に限定された検査について未実施のため、正確な把握には至っていない現状がある。研究テーマに沿った授業研究会の実施は1度だが、ねらいや評価について内容の濃い検討会となった。	C	(1)実施予定の諸検査を早期に実施する。 (1)授業研究会を計3回実施する。
	(中) (1)目標を持ち、知識や技能を身につけようと意欲的に学習する態度の育成に努める。 (2)実態把握に基づく支援方法の共通理解と考える力を育成するための支援の工夫に努める。	(1・2)学習状況が様々であり、個に応じた丁寧な指導をすることが必要である。苦手な教科に、意欲的に取り組もうとし始めた生徒もいる。	(1・2)授業の中で、自分の考えを説明できる。 (1・2)学習に出てくる基礎的な言語を習得する。	(1)生徒自身が自分の考えを説明できるような雰囲気づくりや視覚的支援、発問の仕方等の工夫をする。 (2)適切なコミュニケーション手段を使って、言葉やその言葉の背景となる概念を伝える。 (2)諸検査等の結果や行動観察、各教科の状況等について、情報を共有し、実態把握や共通理解を行い、一貫した支援を行う。	(1)黒板やプロジェクターを使って発表したり自分の考えと友だちの考えを比較して類似点や相違点を見つけたりするような活動の時間を設けるよう努めた。実際に黒板を使って説明したり、比較したりすることで意欲的に自分の考えを発言しようとする場面が見られた。 (2)読み方が難しい言葉は指文字で確認し、板書して確認した。学習言語の手話表現を伝え、その概念を伝えることができた。 (2)学部研究会でNRTの結果や各教科での生徒の実態を共通理解し、支援方法を考えた。	C	(1)引き続き、操作的活動や発問の仕方等を工夫して積極的な発言を引き出すことに努める。 (1)話を聞く態度を育てるために中学部の話の聞き方「あいうえお」を共通理解し、実践する。 (2)似たような言葉を伝えるときは手話表現を伝え、板書で確認をする。 (2)話し合い活動を充実させるための支援方法について学部研究会で検討する。
(高) (1)日々の学習での進路意識を高める指導と進路希望に応じた教科指導の充実を図る。	(1)進路を意識し意欲をもって学習に取り組んでいる生徒、家庭学習の提出や学習時間の確保に課題のある生徒など実態は様々である。日々の授業を活用しながら、指導方法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	(1)基礎学力や思考力が向上し、自ら学ぶ方法を身に付け継続して学習できるようにする。	(1)個々の生徒のつまづきや特性に応じた課題を共通理解する場面を学部会やケース会議、学部研究会などで設定し、課題に応じた指導や支援を行う。 (1)生徒の基礎学力や思考力を高めるために、授業における指導方法について研究を進め、工夫について共有する。 (1)諸検査や日々の情報交換をもとに生徒の実態を把握し、生徒一人一人の進路実現を目指した授業を設定する。	(1)日々の情報交換はもとより、学部研やケース会議等で実態や支援の共通理解を図り、各授業で実践中である。 (1)課題に対する方策を話し合う機会は設けられており、指導法や支援について共有できているが、検査等を活用しているとは言いがたい。	C	(1)一人1授業のさらなる実践を積む。 (1)必要に応じて適したアセスメントを行う。	
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(卒業後を見据えた生きる力の育成)	(支) (1)乳幼児教育相談で保護者に子どもとのかかわり方について支援するよう努める。 (2)通級による指導で、自分のきこえの理解を促し社会参加に向けて望ましい態度を育てる。 (3)個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 (4)聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。	(1)きこえやことばの育ちだけでなく、子どもへの接し方について不安があり支援が必要な保護者が多い。 (2)きこえにくいことに気づきにくく、気づいていても、その困り感を主体的に改善したり軽減したりしにくい。 (3)聴覚障がい教育に初めて関わる地域の学校の課題意識が少なく研修会や情報交換会への参加が全くない学校がある。 (4)医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っているが、地域への理解啓発が不足している。	(1)保護者が子どもの気持ちに寄り添いながら楽しみながらかかわるようになる。 (2)きこえにくい場面があることに気づき、困り感を訴えたり適切な支援を求めたりしようとする。 (3)難聴や発音に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 (4)関係機関や地域と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換をし、よりよい支援を行っている。	(1)保護者の不安を軽減するため、担当者が保護者のニーズを把握し、かかわり方のモデルを示す等、支援方法を具体的に示す。 (2)児童生徒の思いを受けとめたり、担任や保護者と情報を共有したりして、日常生活でのきこえの状態を把握し、適切な指導、支援につなげる。 (3)難聴学級への児童生徒への支援を充実させるため、年に2回程度の参観を実施する。また、相手校からの要望に応じて研修や理解学習を行う。 (4)本校支援部の活動を理解してもらうため、園長会や保健師、特別支援教育主任の集まりに参加し昨年度作成したDVDを活用する。 (4)理解啓発のために、社会福祉協議会や公民館等に案内を配布し、難聴体験など本校ができる活動を周知し、活用を促進する。 (4)個人の耳鼻科医や校医(耳鼻科)との連携が深まるように訪問をする。	(1)コロナ禍で対面での相談ができにくい時は、オンラインを使用して相談を行ったり保護者が家庭で子どもと一緒にかかわれるよう手遊びDVDを作成して配布したりした。 (2)難聴カルタを用いて「自分にもあてはまることがある」「これはない」など自分を知る取り組みを行った。きこえにくい場面があることをとらえることができた。 (3)関係学校長あてに授業参観の依頼文書を送付したところ、ほぼ全ての学校から返答があり、子どもたちの様子を参観することができた。また、担任との懇談を短時間でも実施し、現在の困り感や担任の考えなどを聞くことができた。 (4)啓発活動に関する案内文書を社会福祉協議会や公民館、小・中学校へ送付した。問い合わせが数件あった。 (4)病院への訪問はコロナ禍のためできていない。	B	(1)保護者の気持ちに寄り添うため、保護者が日々の気付きや気持ちを書き留めるノートを配布し、相談時に持参していただき、相談にいかす。 (4)コロナ禍で関係機関を訪問する機会は限られるが、折に触れて今後も周知していく。 (4)病院への訪問は、新型コロナウイルスの状況を見ながら進めていきたい。
	(幼) (1)様々な人とかかわる場を設定し、かかわり方を支援する。	(1)友だちと一緒に遊んだり話しかけたりしたい気持ちはあるが、消極的になりがちである。 (1)周りの人の様子を見て、補聴機器の有無に気づき始めた幼児がいる。	(1)幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。	(1)自分の思いが相手に伝わる経験を増やすため、教師がコミュニケーションの仲立ちをする。 (1)相手に合わせた伝え方ができるよう教師がモデルを示したり、手話を付けるよう声かけをしたりする。	(1)他学部の児童生徒や教職員とかかわる機会を意図的に設定したり、校内の移動時に挨拶を促したりしている。 (1)教師が繰り返し関わり方のモデルを示した結果、次第に幼児自ら手話を使って話しかける場面が増えている。	C	(1)校内での関わりがさらに広がるような様々な機会を利用する。

		年 度 当 初			評 価 結 果 (10)月	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
	(小) (1) 基本的な生活習慣の定着を図り相手を思い合うとともに、社会参加にむけて望ましい習慣や態度を育てる。	(1) 学習規律や生活上の様々なきまりやルールについて自ら守ろうとする姿が見られる。一方で、自分に都合のよい判断のみで行動してしまう場面も見られ、場面に応じた指導が必要である。	(1) 相手のことも考えながら学校内外のきまりやルールを自ら守ることができる。	(1) 場面を捉え、とるべき言動について児童と振り返るようにする。また、ロールプレイ学習やSSTを活用し、適切な言動について考えを深めるようにする。	(1) 定期的に情報交換の会を実施したり、夏休み中に「ソーシャルストーリー」の研修会を持ったりするなど情報の共有や指導法の検討を行った。視覚支援の工夫や教師の体制を配慮することで、少しずつ約束を守って行動しようとする姿がみられるようになってきている。	C (1) SSTや指導法の工夫を継続する。 (1) 振り返りの時間を確保する。
	(中) (1) 自分の障がい等を理解し、自己肯定感を持ちながら自分の課題を克服しようとする態度の育成に努める。 (2) 学校生活や社会生活をよりよく送るためのソーシャルスキルの向上を図る。	(1・2) 自分の障がい等についての理解が十分に進んでいない生徒もいる。自己肯定感が十分に育まれておらず、自発的に行動することに課題を持つ生徒もいる。	(1) 自己理解が進むとともに、自分なりの課題解決方法がわかり、それを実践しようとしている。 (2) 自分なりの考えや思いを持ち、相手や場に応じた受け答えをすることができる。	(1) 自分の障がいを理解し、自分の良さや課題や必要な支援を知る学習や支援を行う。 (1) 課題解決方法を教師と一緒に考え、実践する場面を設定する。 (2) 様々な集団活動を通して、他者の考え方や意見を知る場を意図的に設定したり、日常生活の中でも使えるように社会生活に必要なマナーやルールについて学び、実践する場面を設ける。	(1) きこえ (db, Hz)、コミュニケーション手段・情報保障などの学習を通して、自分のことや他者の状況を互いに理解する活動を積み上げた。 (1) 各教科や生活の中で起きた出来事に対して、教師と一緒に課題解決に向けて考える場面が多々あった。 (2) 学習を設定したり、日々の出来事を使ったりしてマナーやルールを学んで定着を図った。	C (1) 学んだことを活かせるように校外の他者と関わる学習機会を設ける。 (2) ソーシャルスキルを学ぶ場面を設定する。
	(高) (1) 自立と社会参加をめざし、あるゆる活動を通して、主体的に考え行動できる力を培うための指導の充実を図る。	(1) 高等部卒業後の進路については方向性がほぼ決まり、具体的な手続等進めていく必要のある生徒もいる。社会参加に向け、時や場に応じた言葉遣いや行動について課題を持つ生徒もいる。	(1) 将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい等)を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 (1) 社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。	(1) 生徒が課題意識をもって生活できるように、生徒の課題について全教職員が共通認識した上で、指導を徹底する。 (1) 現場体験学習や職場見学、先輩の話を聞く会などを実施し、進路を意識づけるとともに、社会参加に向けて必要な力について考える機会を設定する。	(1) 現場体験学習の実施したあと、振り返りを行った。実習の結果として現れた生徒の課題については、回覧や教室掲示等で共通理解を図り、通常の授業の中でも指導ができるようにした。  (1) 重複障がい学級では、B型アセスメントの評価を受け、自身の課題を知るよい機会となった。これから自分にあう進路について考える学習を計画したい。	C (1) 進路情報を共有化する。特にうまくいかなかった例について、進路担当の分析・私見、事業所の意見等も記載した教師向けの進路通信を作成、配布する。 (1) 2年生で自分の力を知ることは大切な機会なので、就労を考える生徒については、2年生の段階で関係機関とつながる必要がある。
	(幼) (1) 感じたことや考えたことを相手に伝えたり表現したりする力を育てる。	(1) 自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟であったり、経験に伴う言葉の定着が不十分であったりする。	(1) 幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。	(1) 朝の会で幼児の興味関心に沿った話題を取り上げ、伝え合う楽しさが感じられるようにする。 (1) 言葉による正しい表現方法の定着を図るため、幼児の思いを押し量り拡充模倣を促す。	(1) 絵日記や写真などを手がかりにして手話や身振りで表現することで幼児の気持ちや気付きに寄り添ったやり取りができるようになってきた。 (1) 幼児が表現する手話をキューサインで言い換えたり、正しい助詞を付けた文に直して提示したりし、徐々に正しい表現方法が身につくようになる。	C (1) 絵日記が継続するよう保護者への説明や支援を行う。 (1) 継続して正しい表現方法を幼児に示し模倣を促す。
心身の健康と豊かな自己表現力の育成 (心身の育成)	(小) (1) 友だちや教師との活動を通して自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の話を最後まで聞き、理解したりできる力を育てる。	(1) 休憩時間等、子ども同士で自分の意見を伝え話し合いをする場面が増えてきている。自分の思いが強く、友だちの話を最後まで聞くことができなかつたり、話し合いがまとまらないときになかなか解決できなかつたりする場面も見られる。	(1) 相手に自分の経験や考えを正しく伝える。また、相手の話を最後まで聞き、内容を理解しようとする。	(1) 地域の人々など様々な交流の場では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等のルールを事前に確認する。また、学級活動や児童会活動等の集団での時間において、友だちや教師と伝え合う活動を設定し、視覚的なツールを用いる等個別の支援を工夫して行う。	(1) 学校間、居住地等の交流の機会を持つことができなかつた。集団での学習場面では、友だちや教師と伝え合う活動を設定し、聞く態度や話し方等について個別に支援を工夫したことで、4年生が1年生にわかりやすく伝えようとする姿が見られるようになってきている。	C (1) 学校間、居住地交流のやり方を工夫し、実施する。 (1) 行事の前にルールの確認を行い、練習の場を設定する。 (1) 児童が集まって話し合う場を設定していく。 (1) 学部で決めたルールの振り返りの場を作り、視覚的な称賛も取り入れる。
	(中) (1) 日常生活全般を通して、話す意欲と表現力の向上を図る。	(1) 自分の思いを相手に伝えることについて苦手意識のある生徒もいる。 (1) 周りの状況を把握して行動することに課題がある生徒もいる。	(1) 人前で自分の思いを相手に伝えようとしている。 (1) 相手の立場を考えた言動ができるようになる。	(1) 自分の思いの伝え方について特設自立活動(アサーション等)等で学習する機会を持つとともに、日々の生活の中で指導する。 (1) 集団学習(活動)において、自らの行動を客観視できる機会を持ち、どのように改善すべきかを考える場面を設ける。	(1) 帯自立活動では日本語や手話言語の学習を積み重ね、コミュニケーションの基本となる言語の形成を図った。そして、その言語に基づいたコミュニケーション力を伸ばすために自立活動や総合的な学習の時間では話し合い活動の機会を多く設定した。 (1) 本人や周りの友だちから聞き取りをして、時系列でだれが、いつ、何をしたかを確認し、客観的に自分の行動を振り返れるようにした。気持ちを聞き取ったりイラストで気持ちを確認したりした。	C (1) 掲示や遊び道具など、会話をするきっかけを作る環境設定を行う。 (1) 自分の気持ちを確認する学習や自分の気持ちを表現する方法を学ぶ機会を設定する。
	(高) (1) 言語力・表現力・コミュニケーション力の向上を図る学習活動の充実に取り組む。	(1) ほとんどの生徒のコミュニケーション手段は手話、指文字、身振り等であり、指示だけでなく実際に体験し確認をすることが必要な生徒もいる。人と関わることを好む生徒が多いが、適切かつ積極的なコミュニケーションには課題も多い。	(1) 交流や現場体験学習等で相手や場に応じて、積極的かつ適切にコミュニケーションを取ろうとする力が向上してきている。 (1) 自立活動や弁論大会などを通して、自己表現力が向上している。	(1) 相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるように、事前に具体的な場面を想定して練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 (1) 自立活動などの時間を活用し、状況に応じた日本語の使い方や意味の学習を積み重ねることを通して、一人一人の日本語力を伸ばす。 (1) 弁論大会など発表できる場を設定し、自己表現力を高められるようにする。	(1) 現場体験学習に向けて実際に考えられる具体的な場面を想定し、どのような表現が適切であるか考える機会を設定した。現場体験学習では、コミュニケーションがとりにくい場面も多々あったのだが、筆談やスマートフォンなどで工夫してコミュニケーションを図る生徒も見られた。 (1) 自分の手話表現が相手に伝わりやすいかどうかについて学習する場面を設定し、表現方法について振り返った。	C (1) 弁論大会、交流など表現力が高められるような場の設定をする。 (1) 相手や場に応じた適切なコミュニケーション方法について振り返る時間を引き続き設定する。

評価基準 A: 十分達成 (100%) B: 概ね達成 (80%) C: 変化の兆し (60%) D: まだ不十分 (40%) E: 目標・方策の見直し (30%以下)